

全国学生学術文化集會に参加して

小 嶋 章 吾

「語ろう明日の学問を」というテーマで、第12回全国学生学術文化集會（12月集會）が12月18日から3日間、京都・立命館大学を会場に開催された。これは全日本学生自治会連合（全学連）、大学生協連など31の団体によって構成される12月集會実行委員会が主催するもので、全国の大学で行なわれているサークルや自主的なゼミナールの研究、文化・芸術活動の成果をもちより交流し、「友情と連帯の輪をひろげよう」というものである。期間中、全国各地の大学から約 5,600 名の参加者があり、広大から、20数名、総合科学部から2名が参加した。

18日の開會式には12月集會実行委員長（御茶の水大・学生）が基調報告に立ち「激動と革新の時代・70年代後半に学ぶ学生が新しい日本の担い手として成長するため、各大学での学術文化活動の豊かな経験の交流を旺盛にし、活動の一層の発展をかちとる契機にしよう」と強調した。そのあと一橋大の岩崎允胤教授（哲学者）による「現代と学問—70年代後半に学ぶ学生たちへ」と題する記念講演があった。

受付と映画上映中に中核派を名のる学生の妨害があり、若干混乱を招き、嫌な思いをしたが、それにもまして12月集會への参加によって得たものは大であった。キャンパスで学生たちの活気溢れた会話を耳にするにつけ広大で学ぶ我々の果たすべき役割りを考えさせその意欲をかきたてた。井の中の蛙であったことを痛感し、まず悔やまれたのは、どうしてもっと事前に12月集會のことを全学に紹介し参加者を募らなかつたのか、ということ…

12月集會は49の特別入門分科会と専門分野別分科会を中心に催された。例えば日本の文化遺産と民族文化、環境と公害、学校とはなにか、英米文学、社会科学、大学祭、生協、その他サークル、社会問題、学問別など多彩な分科会があった。私は平和問題の分科会に参加した。この分科会への参加者は200名を越え、広大からは5名が参加していた。

平和問題分科会は、映画と講演で始まった。核基地横須賀の実態を望遠レンズでとらえ、はっきりなしに搬入される表示なきカプセルと、その慎重すぎるほどの取り扱いの不気味な様相を映し出した『我

々は監視する』。そしてチリ軍事独裁政権下の人民弾圧の実態、政治犯の強制収容所の実態をドキュメントした『チリ強制収容所』など……

そのあと、名古屋大学教授長谷川正安氏の講演があった。氏は12月の総選挙の結果をどう判断するかという問題を口切りとして、頹廢し、混乱した現代日本の政治的社会的状況を憲法学者の立場から説明した。一見平和に見える学園、社会——けれども、その中に様々な矛盾が内在し、我々の気づかぬうちに我々の生活を、人格を、命を蝕んでいること（例えば頹廢した文化、我々の受けてきた教育、公害と核戦争の危険に充満する環境等々）の事実を知らなければならぬと思った。我々の、そして次の世代の未来をも保障できる社会を築くために、我々のなすべきことは何か、問わなければならぬと思った。そこで学生の、まさに我々の生活基盤である学園生活における課題を考えずにはいられない。

さて、次に平和教育や国際連帯、基地問題などのテーマに別れて討論した。各大学のとりくみの報告を中心に進められたのだが、次のような報告には驚きを禁じえなかつた。東北福祉大学——大学当局が一方的に学生のあらゆる情宣活動を一切禁止した。各サークルは、この問題を解決することを当面の目標にせざるをえない状態になっていること——新聞でも報道があつたので知っている方もいると思うが、なんと広大は恵まれていることか、……貴方のサークルが、ポスター貼りも立看も禁止されたらどうしますか？

12月集會に参加した者として伝えたい最も重要な問題なのですが、全国の大学で自治会のない大学なんてめずらしいのです。自治会？広大にはないから自治会の役割りなんてピンとこないでしょう。私はまだ自治会について具体的に問題提起できる力量もないのですが、皆さんに是非考えて頂きたい問題だと思います。学生の「自治」とは何なのか？ということ。

あらぬ方向に話が進みましたが、今年の12月集會、広大の多くの学生が参加することを希望してペンを置きます。
（社会文化コース）

広島ごみ問題に見られる行政の犯罪性

—瀬野川埋立地設置を中心に—

黒岩 祐治

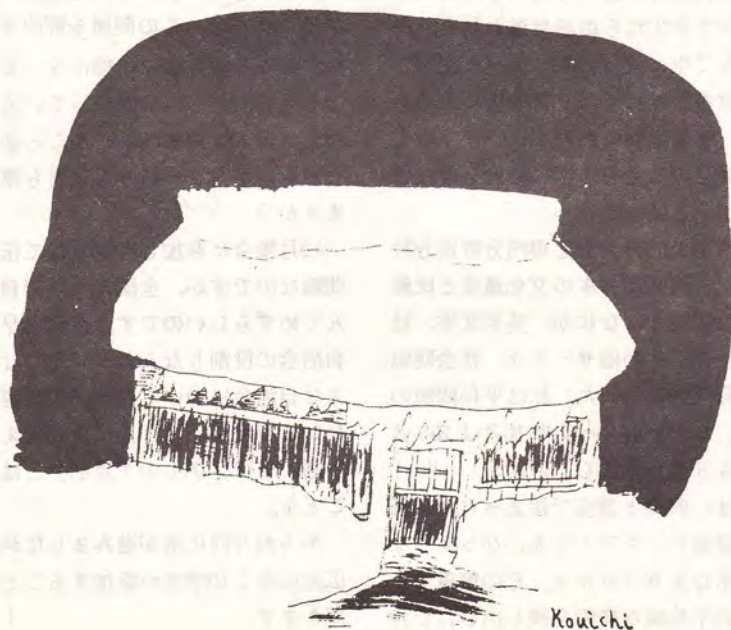
僕は昨年の4月から、広島市当局がゴミ埋立地を設置しようとしている沼田町戸山地区を流れる吉山川の下流の、安佐町久地の住民の家に住み込ませてもらいました。そこで、ゴミ埋立地の設置が住民の生命と生活をどのように破壊するのかを膚で感じてきたわけです。その途中で、現にゴミ埋立てが進行している瀬野川埋立地の公害のひどさを地元住民の方に聞いたり、現埋立地を見て確かめたりして、是非皆さんに知ってもらわなければならないと思い、この文章を書くことにしました。

1973年3月20日、瀬野川町（人口約21,000人）は、安古市町・佐東町・高陽町と共に広島市へ合併した。合併推進側の広島市には、1969年の「新全国開発計画」にのった「100万都市構想」があり、呉地域一日新製鋼等への工業用水管の敷設、71年着工の「西部開発埋立」などへの大規模投資の為に財源を求めている。また瀬野川町当局としては、「工場誘致の為に学校の新・増設の費用を調達する為」と宣伝していた。そして、合併時に「合併建設五か年計画」

なるものが市から提示されていた。その内容は、1—緑地公園設置、2—上下水道整備、3—国道2号線のバイパス建設、4—街路樹用苗による造林・農道整備、5—学校建設（小学校1校新設・同3校増築）、6—山間遊歩道整備・消防施設整備その他である。総額50億円程度となり、「1年で10億円の予算が振り向けられ、これまでの瀬野川町財政の5倍もの予算が使われる。」などと町当局は広報誌などでPRしたそうです。

これに対して、合併前年の秋から瀬野川町民には次のような理由で、合併反対の意見が盛り上がっていました。

1. 都市計画税の新設・固定資産税の増加など納税額が上がる。
2. 教育環境の水準が広島市の程度に落とされる。
3. 老人医療・保育手当など福祉政策が後退する。
4. 学校建設費は評価額100億円を越す町有林の一部を売却すればよい。合併すればその町有林は市有林となり、多額の“持参金付”で合併するような



ものだ。

5. 住民の自治権が著しく低下し、行政の住民サービスが悪くなる。

6. 広島市が用地を捜しているゴミ埋立地か火葬場を持ち込まれるおそれがある。

住民は“瀬野川町政を正す会”を中心に有権者の $\frac{1}{3}$ 弱の4,082名の署名を集め、合併を住民投票で決めるための条例改正と、合併の是非を考えられる判断資料の提出を請求した。町当局は、'72年9月の第2回「合併の説明会」で住民の反対意見が強いを見て、その時に約束した第3回目の説明会を一向に開こうとせず、翌'73年2月の町議会で、住民から出された先の請求は理由も示さずに、傍聴席を埋めた合併反対住民（その頃には反対意見が住民の多数を占めていた）のヤジと怒号の中で不採決を決定。さらに、合併を決める「法定合併協議会設置条例」は、傍聴席から住民を締め出して議決を強行していったのである。誰が、誰のために、何の目的をもって作ろうとしている“広島100万都市”なのでしようか。

さて、話をゴミ問題に戻しましょう。1973年当時の広島市の廃棄物処理行政は、後に可燃・有毒ガス噴出で大問題となる戸坂のゴミ投棄・埋立を終え、その中心を三滝ゴミ埋立地に頼っていました。そして、従来の廃棄物は埋立てればよいという公害を無視した安易な方向を改めず、翌年中には満杯になる三滝ゴミ埋立地の後釜を捜していたのです。一方で、「合併建設5か年計画」に入っている「緑地公園」の用地は、既に前年'72年6月に瀬野川町大山地区に、広島市の開発公社が66.3ヘクタール（66万3千 m^2 ）という広大な土地を買っていたのです。この買収には市の清掃局が入っていたということが後に判明しました。というわけで、合併後3か月しかたっていない'73年6月に、その土地の元地主47名と瀬野川町の開発審議会（元町長・助役・町会議員）委員だけに「公園建設の為、周辺の山を削り取って谷を埋めるのでは自然破壊になるから、市内から出る土砂・ガレキを谷に埋めさせてくれ。」という説明・申し入れをしたのである。大山地区は瀬野川町でも東広島市に近く、瀬野川の中流から上流にかけての地域なんです。また、その計画地から流れる谷川は瀬野川へとすぐ流れ下り、その川の水を農家は田に引き、その川岸の土中を流れる地下水（伏流水）を海田町・瀬野川町民の9割が飲んで居るのです。

従って、瀬野川を汚染する可能性のある（戸坂・三滝の埋立地は、いずれも谷川・地下水を激しく汚染しています。）廃棄物のうちで量的には最大の土砂・ガレキを埋めるからには、瀬野川町全37部落はもちろん海田町の詳細も得なければならないものです。でも市当局は、海田町民と瀬野川町民には、ゴミ搬入後の翌年9月末まで説明会は開きません。



'73年9月、故山田市長は、「瀬野川埋立地は、地元住民の了解が得られるまでは作らない。土砂・ガレキ以外のものは市長の首にかけても入れないだから公害は出ない」と言明し、埋立地への搬入路設置などの予算が通るのです。

それに対して逸早く、瀬野川を上水源としている海田町の町議会で反対決議がなされ、11月には“海田町・瀬野川ごみ埋立を反対する会”が発足し、まず下流の海田町から反対運動は始まります。瀬野川町では、元地主・開発審議会委員のみが市の説明だけで多少知っているだけでした。

翌1974年（昭和49年）2月、市の戸坂ゴミ埋立地の跡地を使った戸坂中学校のグラウンドから、メタンガスなどの可燃ガスや一酸化炭素・亜硫酸ガス・オキシダント・窒素酸化物などの有毒ガスが発生し、ゴミ埋立の危険性を示しました。

3月、清掃局のつき上げで故山田市長は市議会において、前言を憶面もなく翻し瀬野川ゴミ埋立地へ「搬入するものを土砂・ガレキ・建築廃材・粗大ゴミに拡大する」「背に腹はかえられぬ—これが政治というものだ」と全くの無責任、住民を愚弄し、その上居直る発言をして憚らない。この発言は議会で問題になったようだが、市の廃棄物の8割以上を出す産業界と結んだ市長・議員の言い分が通る。これに対して、瀬野川町開発審議会委員全員の署名で抗議文を3月19日市長に手渡し、さらに後日、大山を

除く34部落長連名の「ごみ捨て場設置反対」の請願書を提出した。しかし、既に合併後であり瀬野川町は市の一部、市行政当局の受け入れることではなかったのである。でも、市は反対運動の広がりを恐れてか急速^{きんそく}4月に入って、埋立用地のある地元大山3部落長との廃棄物搬入の確認書を取りつけた。その中で「土砂・ガレキ・建築廃材・粗大ごみ」を目立たない形で断わりを入れ「土砂・ガレキ等」と言い換え、従来の話と同じ「土砂・ガレキ」だけのように見せかけて、搬入する廃棄物の種類を拡大してしまうのである。それから1週間もたない4月16日、市はごみ＝産業廃棄物の埋立てを強行してゆくのである。



テレビの墓場

紙数の関係上、その後の詳しい経過は次号に譲るとして、特に知っておいてほしいことを書くことにします。

これ以後、瀬野川・海田両町民はごみ＝産業廃棄物埋立に反対し、それを中止させ、地域住民に犠牲を強いることのない廃棄物処理行政を迫る運動をしてゆくのである。でも、「ごみ」公害を一から学ばねばならない住民が、平気で嘘を言ってその場しのぎをする市の清掃局・環境事業局を相手に交渉するのだから、住民の苦労は並大抵のものではなかった。その翌年1975年8月には既に、埋立地下の湧き水から鉄・マンガン・カドミウムが検出され、その汚水が流れ込む飲料水源瀬野川に奇形魚が現われる、という衝撃の事実がその水を飲んでいる住民はもちろんのこと、後で知った僕らをも震撼させたのである。しかし、住民の再々の埋立中止要求にもかかわらず、市は「重金属は基準以下である」と言って、今だに埋立を強行し続けている。あの周囲を威圧するような、市役所・議会内で、これほどまでに住民の人権

を無視し腐敗した無責任な行政がまかり通っていることに一学生として、一有権者として、一広島市民として悲しみと憤りを禁じ得ない。



蛍光灯がぎっしり

瀬野川埋立地の汚染が進む一方で、市当局は三滝埋立地の後釜として生ごみ埋立地を早急に捜さねばならなかった。瀬野川埋立地での埋立開始から4か月後の'74年8月、秋山清掃局長は沼田町('71年4月広島市と合併)戸山地区を視察し、沼田支所長岡田氏に廃棄物処理施設の設置を申し込んだ。これに端を突いた戸山の廃棄物埋立計画に対する住民の反対運動は、訴訟を起こして市の不当性を明らかにしてきた。この計画はもし実施されたならば、沼田町戸山・安佐町久地両地区住民に、瀬野川・海田両町の公害にまさるとも劣らない公害と自然破壊による災害とをもたらすこと必至である。すなわち、戸山の「ごみ埋立地」から流れ下る汚水は、清流吉山川を汚染し、戸山・久地住民の生命と生活をむしばみ、美しい自然に頼って生きる住民の精神をも荒廃させるだろう。さらにその汚水は、半日・12時間もたてば市の飲料水源高瀬堰の八木取水口に達して、広島市郊外・市街地60万人にのぼる市民の水道のじゃ口から戸山の「ごみ汚水」の混った水が出ることになるのである。市の役人はこう言うだろう。「法律に記載されている有害物質はすべてチェックしたが、基準値に達するものは一つもない。だから安心して飲んで下さい。」と。

以上、広島市との合併に端を突いた瀬野川町大山のごみ＝産業廃棄物埋立強行に見る市行政の類廃ぶりと、住民の生命を軽んずる産業界とゆ着した行政の犯罪性、公害の深刻な実態、市が進めている沼田町戸山地区への廃棄物埋立計画の無望さを見てき